竹富島における結願祭の祭祀空間に関する研究

－祭祀空間にみる祈願の分担方法について－

STUDY ON THE SPATIAL CONSTRUCTION AND COMPOSITION OF THE “KITSUGAN” HARVEST FESTIVAL ON TAKETOMI ISLAND, YAEYAMA, OKINAWA

－ Analysis relating to the system and function of the places of worship －

金城正紀*

Masanori KINJYO

This paper aims to analyze the spatial construction and composition of the “Kitsugan” harvest festival on Taketomi Island, Yaeyama, Okinawa.

There are lots of place of worship and six groups of prayers, *Yamaninju*, on Taketomi Island. Each group has a primary place of worship.

In order to clarify multi-function of each place of worship and ritual composition and procedure in each village, the relationship between ①*Yamaninju*'s primary place of worship, ②places of worship to which *Yamaninju* should pray, and ③types and locations of the place of worship is analyzed in detail through a review of the performing procedure of the “Kitsugan” harvest ritual.

Data were collected and recorded from a series of field studies and literary reviews of the period.

Keywords : *Okinawa, Taketomi Island, Festival, Ritual,*

沖縄、竹富島、祭祀、儀礼

1 はじめに

南西諸島の集落には、拝所である御嶽（ウタキ、オン、ワン、ウガン）^{注1)}や井戸（カー）、来訪神歓待の場所（ニライカナイ、ニーラン）などが点在する。なかでも御嶽は、伝説的な英雄や祖神の墓地、旧集落跡や島づくりの神を祀った場所が多く、様々な固有性と機能を持つ。島の代表的な拝所には祭祀集団が所属し祭祀が行われ、それに伴う集落の空間認識や、神話や伝承に基づいた祭祀空間の構造を捉えることができる。

一方で、拝所によっては複数の神を祀り、複合的な機能を持つものもある^{注2)}。また、本来御嶽と呼ばれていなかった拝所が、御嶽と呼ばれるようになるケースや、遠くにある拝所を遙拝する場所として一時的な拝所を仮設するケースもみられる^{注3)}。また拝所での祭祀や祈願に、その拝所に所属しない祭祀集団が参加する場合がある^{注4)}。

このように、1) 拝所が本来持っていなかった機能・名称が付加し、拝所の意味が変容・複合化したり、2) 拝所に所属し管轄する祭祀集団と、実際に祭祀を行う主体が異なる背景には以下の2つの要因が挙げられよう。

1) の要因の1つとして、居住域の遠方にある拝所が近隣に對置されたり、拝所と居住域のそれぞれの立地特性から新たな機能や名

称が付加されるなど、拝所と居住域の相対的な立地関係を背景に、新たな空間認識が生じたためだと考えられる。すなわち、空間的な要因によるものである。

また2) の要因の1つとして、公民館などの近代的な自治組織による祭祀運営の合理化や婚姻関係の複雑化、世襲制の衰退に伴う祭祀集団の複雑化など、村落社会の近代化に伴って生じた複層的な所属を背景に、祭祀の主体が再構成されたことが考えられる。すなわち、社会的な要因によるものである。

このように、拝所の意味や機能の変容・複合化と、拝所への所属と祈願主体の相異からは、神話や伝承に基づいて秩序立てられた祭祀空間の構造とは異なった祭祀空間の構造を検出することができる。その祭祀空間は、空間的・社会的要因を背景に構造化・再編されていると予想し、その要因を探究することを本研究の課題とした。

そこで本稿は、様々な拝所や御嶽の類型と立地特性がみられ、年間複数の祭祀行事が行われるなか、複数の祭祀集団が現れる、沖縄県八重山郡竹富島の祭祀空間を題材に前記課題を検証する。

竹富島の御嶽の立地特性と集落空間の関係を考察した研究では、『沖縄八重山諸島の村落信仰における伝統的祭祀施設の空間構造に関する研究－聖なる空間の形態学序説－』（浦山隆一，1999年）^{注5)}

* 東京芸術大学大学院美術研究科後期博士過程 修士(美術)

Doctoral Course, Tokyo National University of Fine Arts and Music, M. Fine. Arts

がある。この研究では、現居住域への草分け・後入りを背景に、旧居住域を表徴する6つの祭祀集団の居住構成と、6カ所の御嶽（旧居住跡）の位置関係の特性を捉えている。現居住域における祭祀集団の居住構成の秩序が、現居住域の周縁にある旧居住跡の立地特性から影響を受けていることを発見している。

現在、竹富島の祭祀行事では、6つの旧居住跡を表徴し、神話・伝承を背景として存在する祭祀集団は、穂利祭（ブイ）と長月祝い（ナーキヨイ）の2つの祭祀以外には現れず、ほとんどの祭祀では神職役と近代的な自治組織である公民館役員や村住人が祭祀に参加している。また、拝所への所属と、実際にその拝所で祈願をする祈願主体の所属はすべて同一ではなく、祈願対象によって祈願主体が構成されるため、両者の関係は複層的である^{注6)}。すなわち、竹富島におけるいくつかの祭祀は再編されている。

そこで、祭祀再編について論じた『変貌する祭祀－沖縄の女性祭祀集団の持続と再編に関する一考察－』（渋谷研，沖縄民俗研究第14号，1994）^{注7)}で渋谷は、＜主体（担い手）＞・＜装置（組織）＞・＜論理（世界観など）＞の3つに視点を置いている。主に＜主体＞と＜装置＞の関係に変貌研究の視点を置き、これら祭祀変貌の背景には＜論理＞に影響された＜装置＞の改変があると言及する。この研究は、集落の自治組織が近代化していく中で、実際に祈願する主体が再構成され、祭祀が地域で内発的・積極的に維持されていく様相を描きだそうとしており、その視点や分析方法は本稿に共通する部分を持っている。

しかし、これら既往研究の考察には、拝所を一義的な場所・対象として捉え、更にその場所・対象を実際に祈願する主体（祭祀集団）も一律な属性として捉えていることが前提にあり、拝所が持ちうる多義性や、祈願主体の複層的な属性を前提にした祭祀空間の考察が希薄といえる。

そこで本稿は、竹富島の大祭の1つである「結願祭（キツガン）」を取り上げる。結願祭では、6つの旧居住域跡を表徴する祭祀集団は現れないにも関わらず、その祭祀集団に所属する神職役と、現在の居住域である3つの村を単位とした自治組織の役員が、島の代表的な拝所の大半を祈願する。

神職役は祭祀集団に所属するだけでなく、3つの村を単位としたいずれかの自治組織にも所属し、役員は自治組織に所属するだけでなく、いずれかの祭祀集団にも所属する。更にこの祭祀では、6つの祭祀集団への所属と、実際に御嶽へ祈願する祈願主体の構成は同等ではない。

すなわち、結願祭の祭祀空間を研究題材とすることで、拝所の多義性および、祈願主体の複層的な属性とその構成が捉えられ、本稿の課題である神話・伝承とは異なった隠れた空間的要因あるいは社会的要因を探索することができると考える。

研究の方法としては、まず結願祭の祭祀進行にみる祈願ルートを基に祭祀空間の構造を明らかにし、更にそれぞれの拝所の立地特性から見てくる空間的秩序と拝所の多義性を

明らかにしたい。また、祈願主体の祭祀集団（御嶽）と自治組織（居住構成）への所属から得られる祈願主体の複合的な属性と、それから見てくる社会的秩序、および実際に場所・対象で祈願を行う祈願主体の構成との関係を明らかにしたい。

すなわち本稿は、集落空間や祭祀の構造を背景にみる祈願対象（拝所）の位置と、近代的な村落社会の重層構造にみる祈願主体の属性と構成および祈願の分担方法から、結願祭に隠れている空間的・社会的な“構成秩序”を明らかにする研究である。

2 集落空間と祭祀集団

考察を行う前に、竹富島の集落空間と社会組織について、拝所の類型・分布と御嶽および自治組織への所属に依拠してまとめておく。

2.1 竹富島の集落と拝所

竹富島の居住域は島のほぼ中央に位置し、「ンブフル」という丘を挟んで坡座間村と仲筋村から構成される。坡座間村は、村を南北に貫く「ナビンドー」と呼ばれる道を挟んで、東屋敷に所在する東村（アイノタ）と、西屋敷に所在する西村（インノタ）から構成される。この東村・西村・仲筋村の区分は明治36年の人頭税廃止と共に施行されたとされる^{注8)}。居住域から島の沿岸部へは道が放射状に延び、その道沿いに「御嶽（オン）」や「ニーラン」^{注9)}などの拝所が点在する（図1）。

2.2 拝所の類型と分布からみた集落空間

公民館祭祀行事に関わる御嶽は、祭祀集団の所属や管理から大きく「村御嶽（ムラオン）」・「元の御嶽（ムトゥヌヤマ）」・「子御嶽（ファーオン）」の3つの類型で捉えることができる（図1）。村御嶽は島全体の公的な御嶽として、子御嶽は元の御嶽の分祇的御嶽として、また両者は島の祭祀集団の御嶽として位置づけられる^{注10)}。

また、これらの類型とは別に、島で代表的な拝所としてニーラン、真知御嶽、弥勒奉安殿があげられる。

ここでこれらの所在地をみると、村御嶽は居住域に、元の御嶽は集落の中間域に、白金御嶽・埴山御嶽を除いた子御嶽とニーランは沿岸域に点在し、その他の真知御嶽や弥勒奉安殿は居住域周辺に所

図1 御嶽の分布・類型と立地特性

図2 殿居元の分布および神司・公民館執行部の＜居住構成＞

にしていることがわかる(図1)。

また、居住域の中間域・北側に立地する坂座間御嶽の子御嶽は、同じ方角の沿岸域・北側に、中間域・東側に立地する花城御嶽の子御嶽は同じ方角の沿岸域・東側に、中間域・西側に立地する仲筋御嶽の子御嶽は同じ方角の沿岸域・西側に立地している(図1)。

このように、竹富島にみる御嶽の3つの類型にみる立地関係は例外があるもののほぼ同心円状に、更に一部の元の御嶽とその分祇的御嶽である子御嶽の立地関係は放射状になっており、御嶽の分布からは二重の空間的秩序が捉えられる。

2.3 御嶽の祭祀集団と居住構成

いくつかの御嶽には、「氏子(オンビ)」が所属する。6つの元の御嶽の各々に所属する氏子集団を「山人数(ヤマニンジュ)」と呼ぶ。山人数の祭祀を司る神職役の氏子を「神司(カンツカサ)」と呼ぶ。山人数は、それぞれの宗家である「殿居元(トゥニムウト)」を持つ。穂利祭と長月祝いでは、元の御嶽と子御嶽を一組として、それぞれに所属する山人数が各々の御嶽を祈願・参拝する^{注11)}。

坂座間御嶽・波利若御嶽・花城御嶽・久間原御嶽の氏子は、坂座間村に多く居住し、仲筋御嶽・幸本御嶽の氏子は仲筋村に多く居住するとされてきた^{注12)}。現在の殿居元の所在をみると、坂座間御嶽・波利若御嶽・花城御嶽の殿居元は西村に、久間原御嶽の殿居元は東村に、仲筋御嶽・幸本御嶽の殿居元は仲筋村に所在する。加えて現在は、坂座間御嶽・波利若御嶽の神司が西村に、花城御嶽・久間原御嶽の神司が東村に、仲筋御嶽・幸本御嶽の神司が仲筋村に居住する(図2上段)。

このように、殿居元の立地と神司の居住位置の構成関係を見ると、坂座間村と仲筋村の2つに区分できる。しかし、花城御嶽の殿居元が西村に、神司の住居が東村にあることから、東村・西村・仲筋村の3つに明確には区分できない(図2下段)^{注13)}。

2.4 自治組織と村住人の居住構成

公民館の祭祀行事には、集落の自治組織である「公民館執行部」が参加し、祭祀集団の役目を担う。公民館執行部は、公民館長(1人)・主事(2人)・顧問(3人の長老)・有志(3人)・祭事部(3人)で組織される。公民館長は3つの村(東村・西村・仲筋村)から1人選ばれ、主事は公民館長が選ばれなかった他の2つの村から1人ずつ選ばれる。顧問・有志・祭事部は3つの村から1人ずつ選ばれる。

また村住人は、一部の祭祀において、3つの村単位(東村住人・西村住人・仲筋村住人)で祭祀に参加しており、祭祀集団としての村住人は、自治単位を基に構成されているといえる^{注14)}。

よって、祭祀集団としての村住人と公民館執行部の居住構成は、3つの村(東村・西村・仲筋村)に明確に区分できる。

2.5 氏子と村住人・公民館執行部の関係

上記のように、同属の殿居元と神司の居住構成は2つの村(坂座間村・仲筋村)に、村住人と公民館執行部の居住構成は3つの村(東村・西村・仲筋村)に明確に区分できることから、島の6つの元の御嶽に所属する殿居元・氏子の居住構成と、祭祀集団であり自治単位を基に構成される村住人・公民館執行部の居住構成に相異がみられる。また、6つの元の御嶽に所属する氏子は、同時に村住人や公民館執行部であることから、島の住人は2つの社会的な属性を持つ。

このように、竹富島の祭祀集団と村の構成は、二重の社会的秩序を背景に存在していることが解る^{注15)}。

3 結願祭の祭祀空間

3.1 結願祭の概要

結願祭は、八重山地域に伝わる一連の豊年祝りの1つで、神司が御嶽で夜籠もりを行うことや、いままでの願いへの感謝と、願解きが行われる^{注16)}。また、村の代表的な御嶽の神前で奉納芸能が行われることが一般的な特徴である。

竹富島の結願祭は、1875年から行われており^{注17)}、旧暦8月ミズノエから2日間かけて行われる。本稿では、2004年9月20・21日に行われた結願祭の筆者らによる調査を基に考察を行っている。祭祀におけるルートと、それぞれの祈願対象の位置と祈願主体の構成を、2人で分担して調査記録を行った^{注18)}。

3.2 結願祭の祭祀空間

結願祭1日目の夕刻から神司が、一晚御嶽の神と過ごす「夜籠もり(ユングマイ)」を行う。久間原御嶽・波利若御嶽の神司が西塘御嶽に、坂座間御嶽・仲筋御嶽の神司が清明御嶽に、幸本御嶽・花城御嶽の神司が幸本御嶽に籠もる。その最中(夕刻過ぎ)に、公民館執行部(館長・主事・顧問)が3ヵ所それぞれの御嶽で参詣を行う(図3)。

結願祭2日目は、早朝に、公民館執行部と大山家・与那国家の男性主人が、弥勒奉安殿に集まり祈願を行う。その後、3ヵ所の御嶽で夜籠もりをしていた神司全員と、弥勒の祈願を終えた公民館執行部が坂座間御嶽で合流し、坂座間御嶽をはじめに、世持御嶽・仲筋

図3 結願祭1日目・公民館執行部参詣のルート図

図4 結願祭2日目前半・神司と公民館執行部祈願のルート図

図5 結願祭2日目後半・神司と公民館執行部祈願のルート図

御嶽・幸本御嶽・国仲御嶽・久間原御嶽・花城御嶽・波利若御嶽の順で8カ所の御嶽を祈願して廻る（図4）。

そして、城座間御嶽・波利若御嶽の神司と西村の主事は美崎御嶽・親泊御嶽へ、花城御嶽・久間原御嶽の神司と東村の主事（兼館長）は東美崎御嶽へ、仲筋御嶽・幸本御嶽の神司と仲筋村の主事はニーランへそれぞれ分かれて祈願を行う。またこの時、仲筋村の男司が西美崎御嶽で祈願を行う^{注19)}（図5）。

それぞれの拝所での祈願を終えた神司と公民館執行部は、真知御嶽に集合し、祈願を行う。その後、ナビンドーに面し3つの村の中央に位置する根原屋（城座間御嶽の殿居元）で祈願を行う。

一連の拝所での祈願を終えた神司と公民館執行部は、島のほぼ中央に位置し、島造りの神が祀られている清明御嶽へと移動する。神司全員が清明御嶽での祈願を行った後、清明御嶽の前に設営された舞台上、各村による奉納芸能が催される（図5）。

3.3 祭祀空間の構造

結願祭における祈願や儀礼は、西塘御嶽・清明御嶽・幸本御嶽が点在する集落の居住域周辺から、城座間御嶽・世持御嶽・仲筋御嶽・幸本御嶽・国仲御嶽・久間原御嶽・花城御嶽・波利若御嶽が点在する中間域周辺へ移動し、その後分かれて美崎御嶽・親泊御嶽・東美崎御嶽・ニーラン・西美崎御嶽が点在する沿岸域へと移動している。そして、真知御嶽で合流し祈願を行った後、集落の中心にあり村立てを象徴する根原屋を祈願し、最後に奉納芸能が行われる清明御嶽へと移動している。

このように、結願祭の祭祀空間は、集落の中心（居住域・居住域周辺）から始まり周縁（中間域・沿岸域）へ移動し、再度集落の中心（居住域・居住域周辺）に移動しており、御嶽の立地特性からみた集落の同心円状という空間的秩序に基づいて構成されていることが伺える（表1下段）。

4 祭祀再編と祈願の分担方法

4.1 祈願対象と祈願主体の複層的な関係

元の御嶽である幸本御嶽は、村御嶽である西塘御嶽と清明御嶽と並んで夜籠もりの御嶽として機能していることから、村御嶽に類似した機能も持ち合わせていると言える^{注20)}。また、村御嶽である国仲御嶽・世持御嶽と並んで6カ所の元の御嶽を、それぞれの元の御嶽に所属しない他の神司も含めた神司全員と公民館執行部が同伴

表1 <祈願対象の所属・管理>および結願祭の祭祀空間と<祈願主体の構成>の関係

拝所の意味・機能						結願祭の進行と祈願主体									
総称		機能による種別	御嶽名	祀られている神	管理・所属	位置	1日目		2日目						
							午後	午後・参詣	午前・前段	午前・後段	午後・前段	午後・後段			
八山	村御嶽（ムラオン）		世持御嶽	火之神・農耕の神	公民館	居住域	波司・久司	公・願	全司・公・願			全司・公・願・村住			
			西塘御嶽	島の守り神・政治の神					全司・公・願						
			清明御嶽	島造りの神・山造りの神					全司・公・願						
			国仲御嶽	国の平和の守り神					全司・公・願						
	六山	元の御嶽（ムトゥヤマ）	城座間御嶽	粟の神	各御嶽の氏子	中間域	幸司・花司	公・願	全司・公・願						
			仲筋御嶽	麦の神					全司・公・願						
			幸本御嶽	豆の神					全司・公・願						
			久間原御嶽	山林の神					全司・公・願						
			花城御嶽	海の神					全司・公・願						
			波利若御嶽	雨の神					全司・公・願						
	子御嶽（ファーンオン）		美崎御嶽	海上平安の神	城座間御嶽の氏子	沿岸域			波司・波司、各公	波司・波司、各公	花司・久司、各公	男司			
			親泊御嶽	海と船の守り神									花城御嶽の氏子	仲筋御嶽の氏子	沿岸域
			東美崎御嶽	海とイモの神											
			西美崎御嶽	海と生物の神									居住域周辺		
			日全御嶽	築城の神	居住域周辺										
			連山御嶽	病魔祓いの神		居住域周辺									
その他		プサン御嶽	仲筋御嶽の発祥地	公民館	沿岸域										
		真知御嶽	豊穡の神			居住域周辺									
		ニーラン	来訪神接待の場所						居住域						
		弥勒奉安殿	来訪神の仮面を奉安			居住域									
		城座間御嶽の殿居元	根原家						居住域						
		根原金殿（集落の祖神）	城座間御嶽の氏子												

神司による夜籠もり		島の拝所を手分けて祈願		奉納芸能
居住域 中間域	居住域 中間域	沿岸域	居住域 居住域周辺	居住域
中心		周縁	中心	

祭祀の種別
祭記空間の構造

全司・神司全員 波司・城座間御嶽の神司 仲司・仲筋御嶽の神司 幸司・幸本御嶽の神司 （注2001年のみ） 久司・久間原御嶽の神司 花司・花城御嶽の神司 波司・波利若御嶽の神司 公・館長・主事・有志 願・顧問 各公・各村の館長or主事 男司・仲筋村在住男性の司 真氏・真知御嶽の所属氏子
--

して祈願している。このように祈願対象と祈願主体の関係にみる祈願方法からは、元の御嶽が氏子の御嶽として機能しているだけでなく、村御嶽としての機能を持ち合わせていることが伺える(表1)。更に、沿岸域に点在する子御嶽とニーランを、所属する神司と所属しない神司・公民館執行部(館長・主事2人)が分かれて祈願を行っている(表1)。

氏子集団が現れる徳利祭と長月祝いでは、元の御嶽と元の御嶽の分祇の拝所である子御嶽を、それぞれに所属する氏子集団が主体となり祈願を行う。すなわち、この2つの祭祀においては、元の御嶽と子御嶽での<祈願主体の構成>と<元の御嶽への所属>は一致している。

しかし、氏子集団が現れない結願祭においては、<祈願主体の構成>と<元の御嶽への所属>の関係は複層的で、特に沿岸域の数カ所の拝所においては、それぞれに異なった<祈願主体の構成>がみられる。

4.2 沿岸域における拝所の多義性

元の御嶽と子御嶽は、本質的には氏子の御嶽で、独自の神が祀られ、それぞれ異なった意味や機能を持っている。また、ニーランは来訪神歓待の場所として機能している(表1)。

しかし聞き取りによれば、結願祭において沿岸域の4カ所の子御嶽とニーランを、神司・男性の司・公民館執行部(館長・主事)がして祈願する目的は、集落の四隅を守護する祈りをするためであるという^{注2)}。すなわち、沿岸部に点在する子御嶽とニーランは、それぞれ独自の意味や機能を持つだけでなく、島の4隅を守護する場所としても機能しているのである。(表1・図5)。

このようなことから沿岸域にある拝所は、結願祭の祭祀空間が中心→周縁→中心と移動する祭祀空間の構造、あるいは拝所の類型と点在状況から見えてくる居住域・中間域・沿岸域という同心円状の

空間的秩序を背景に、集落における内・外の境界として見立てられ、多義性を持った拝所であることが解る。

4.3 沿岸域の拝所における祈願主体の構成

結願祭の沿岸域における祈願主体の<元の御嶽への所属>と<居住構成>の関係、すなわち<祈願主体の属性>と<元の御嶽の立地方角>の関係を、表2左側に記した。また、沿岸域における<拝所の立地方角>を表2右側に記し、元の御嶽と分祇の拝所である子御嶽との関係をグラデーションで表現した。更に、沿岸域の拝所における<祈願主体の構成>とその分担方法を、<祈願の分担方法>として矢印で示した(表2)。

調査を行った2004年時点では、玻座間御嶽・波利若御嶽の神司は西村に、花城御嶽・久間原御嶽の神司は東村に、幸本御嶽・仲筋御嶽の神司は仲筋村にそれぞれ居住している(図2・表2上段)。この年の結願祭では、玻座間御嶽・波利若御嶽の神司が美崎御嶽・親泊御嶽へ、久間原御嶽・花城御嶽の神司が東美崎御嶽へ、仲筋御嶽・幸本御嶽の神司がニーランへと分かれて祈願を行っている(表2上段)。

また、同行する東村の主事(兼館長・花城御嶽へ所属)は東美崎へ、西村の主事(久間原御嶽へ所属)は美崎御嶽・親泊御嶽へ、仲筋村の主事(仲筋御嶽へ所属)はニーランへと分かれ、神司の補佐および祈願を行っている(表2上段)。

表2上段に示す通り、<祈願主体の構成>と<祈願主体の属性>に複層的関係を捉えることができ、また結願祭の沿岸域の拝所における<祈願主体の構成>は、<元御嶽への所属>や<元御嶽・子御嶽の立地方角>に関係なく、東村に居住する祈願主体は東美崎御嶽を、西村に居住する祈願主体は美崎御嶽・親泊御嶽を、仲筋村に居住する祈願主体は西美崎御嶽とニーランを祈願している。

すなわち、2004年の結願祭にみる沿岸域の拝所にみられる<祈願主体の構成>は、<居住構成>に従っているように捉えられる(表2上段)。

4.4 祈願主体の構成とその再編

1965年の結願祭が記録されている『沖縄民俗』(琉球大学民俗研究クラブ編・1988)と、1987年の結願祭が記録されている『竹富島の歴史と民俗』(亀井秀一・1990)によると、子御嶽への祈願主体の構成が2004年とは異なる。玻座間御嶽の神司は、美崎御嶽・親泊御嶽へ、波利若御嶽・花城御嶽・久間原御嶽の神司は東美崎御嶽へ、仲筋御嶽の神司はニーランへと分かれて祈願を行っていたことが記されている^{注22)}。

またこの当時、波利若御嶽・久間原御嶽の神司は西村に、玻座間御嶽・花城御嶽の神司は東村に、幸本御嶽・仲筋御嶽の神司は仲筋村にそれぞれ居住していた(表3)^{注23)}。

ここで、<祈願主体の構成>と<祈願主体の属性>にみる

表2 <祈願主体の属性>と沿岸域の拝所における<祈願主体の構成>

記録年	元御嶽の立地方角	元御嶽への所属	居住構成	祈願の分担方法	沿岸域の拝所	拝所の立地方角
			玻座間村 西村 東村 仲筋村			
2004年	北 ① 東 ② 東 ③ 東 ④ 西 ⑤ 西 ⑥	1 玻座間御嶽 2 波利若御嶽 3 花城御嶽 4 久間原御嶽 5 幸本御嶽 6 仲筋御嶽	(神司) (神司) (神司) (神司) (神司) (神司)	→ → → → → →	7 美崎御嶽・8 親泊御嶽 9 東美崎御嶽 10 西美崎御嶽 11 ニーラン	北 ⑦ 東 ⑧ 東 ⑨ 西 ⑩ 西 ⑪
1987年	北 ① 東 ② 東 ③ 東 ④ 西 ⑤ 西 ⑥	1 玻座間御嶽 2 波利若御嶽 3 花城御嶽 4 久間原御嶽 5 幸本御嶽 6 仲筋御嶽	(神司) (神司) (神司) (神司) (神司) (神司)	→ → → → → →	7 美崎御嶽・8 親泊御嶽 9 東美崎御嶽 10 西美崎御嶽 11 ニーラン	北 ⑦ 東 ⑧ 東 ⑨ 西 ⑩ 西 ⑪
			元御嶽	分祇の関係		子御嶽

注1) 2004年、幸本御嶽の神司は不在だが、仲筋御嶽の神司と主事が、幸本御嶽の神司が担当する供物をニーランの所定位置に準備している。
 注2) 上勢諸氏への聞き取りによると、1987年に幸本御嶽の神司は不在だが、参考文献1)にみる1987年(昭和62年)の結願祭の記録には、幸本御嶽の神司がニーランへ行っていることが記述されている。記述の誤りか、聞き取りによって得たもので、実際に祈願状況を確認していないと思われる。また、参考文献1)の1965年における「ユニンガイ」の記録時には、幸本御嶽は兼任しており、幸本御嶽の神司が、西美崎御嶽とニーランの両方へ行っていることが記されている。

図6 沿岸域の拝所における＜祈願主体の構成＞の再編と神司着任の変遷

複層的関係を、表2の1987年の下段に示した。表2下段からもわかるように、1987年当時の沿岸域の拝所における＜祈願主体の構成＞は、＜元の御嶽・子御嶽の立地方角＞を基に構成され、それぞれの祈願対象は沿岸域における＜拝所の立地方角＞に従っているように捉えられ、2004年の記録でみる沿岸域の拝所における＜祈願主体の構成＞が祈願主体の＜居住構成＞に従う状況とは異なっていたことが解る（表2下段）。

このように、祈願主体の＜元の御嶽への所属＞＜元の御嶽・子御嶽の立地方角＞＜居住構成＞に依拠し、結願祭の沿岸域の拝所における＜祈願主体の構成＞を考察してゆくと、＜元の御嶽・子御嶽の立地方角＞という放射状の空間的秩序から、＜居住構成＞すなわち明治36年から施行された近代的な自治単位（東村・西村・仲筋村）という社会的秩序へと再編され、近年にみる分担方法になったように捉えられる（表2）。

4.5 神司継承にみる祈願主体再編の背景

以前、神司が6人から2人へと減少する時期があった。玻座間御嶽・波利若御嶽・久間原御嶽・幸本御嶽には、しばらく実質的な神司が着任していなかった^{注24)}。その後1991年に、波利若御嶽の神司が就任した。その年、沿岸域3方角の拝所（北側的美崎御嶽と親泊御嶽・東側の東美崎御嶽・西側の西美崎御嶽とニーラン）への拝所へ

の祈願分担をする際に、波利若御嶽の神司が玻座間御嶽の神司代理と共に北側的美崎御嶽・親泊御嶽を祈願した。その後に着任した玻座間御嶽・久間原御嶽の2人の神司は^{注25)}、以前の＜元の御嶽・子御嶽の立地方角＞に従った分担方法で祈願するが、波利若御嶽の神司は引き続き北側的美崎御嶽・親泊御嶽を祈願し、現在の＜祈願の分担方法＞に至っている^{注26)}（図6）。

このように現在の結願祭では、3つの村に居住する神司が2人ずつ、公民館長・主事が1人ずつ、それぞれ3方角へ分担して祈願することから、一見＜居住構成（自治単位）＞に依拠して祈願主体が構成され、3方角の拝所の祈願を合理的に分担しているように捉えられる。

しかし、結願祭における沿岸域での祈願主体の構成再編の背景には、神司不足の時期において特殊な分担方法が生じたことが起因で、後に神司が増えた近年になって後天的に定着した＜祈願の分担方法＞と＜祈願主体の構成＞が隠れていたことが解る（図6）。

5 結語

本稿では、結願祭の祭祀空間の構造を背景に、祈願主体の＜元の御嶽への所属＞＜居住構成＞から捉えられる＜祈願主体の属性＞と、＜祈願主体の構成＞＜拝所の立地方角＞の関係を考察することで、以下の点を明らかにすることができた。

1) 村御嶽・元の御嶽・子御嶽・その他の拝所を、御嶽や拝所への所属とは関係なく、神司と公民館執行部が同伴または分担して祈願していることから、祈願対象への所属と祈願主体の関係は複層的である。

2) 沿岸域に点在する拝所の一部は、それぞれ神話・伝承に基づいた独自の意味や機能だけでなく、拝所の立地特性や祭祀空間の構造

表3 神司の居住構成

村域	1962～1987年頃の神司の居住構成			
	1987年頃		1961～1962年頃	
	屋号	所属の御嶽	屋号	所属の御嶽
玻座間村	新屋	波利若御嶽	大山屋	波利若御嶽
	本福屋	久間原御嶽	安里屋	久間原御嶽
	ナビンドー（道）		石川屋	玻座間御嶽
	石川屋	玻座間御嶽	仲盛屋	花城御嶽
東村	内盛屋	花城御嶽	東玉盛屋	幸本御嶽
	ンブフル（丘）		登野原屋	仲筋御嶽
仲筋村	幸本御嶽	不在	登野原屋	仲筋御嶽
	登野原屋	仲筋御嶽	登野原屋	登野原御嶽

から見えてくる同心円状の空間的秩序を背景に、集落における内・外の境界として見立てられ、多義的な意味や機能を持つ。

3) 沿岸域の拝所における〈祈願主体の構成〉の背景にある構成秩序は、以前所属する元の御嶽・子御嶽の立地方角〉という放射状の空間的秩序に従っており、近年になって祈願主体の〈居住構成（自治単位）〉という社会的秩序へと従うようになったように捉えられる。しかしその起因は、神司の継承・着任の過程において特殊なく祈願の分担方法〉が生じ、後天的に定着した〈祈願主体の構成〉であることが解った。

このように結願祭の祭祀空間における祈願対象の立地特性や、祈願対象と祈願主体の複層的な関係を読み解くことで、神話・伝承による規範からだけでは捉えられない2つの構成秩序を背景にみた分担方法の変化が得られた。

謝辞

調査や資料作成にあたって支援と訂正を頂いた上勢頭芳徳氏（竹富島喜宝院蒐集館館長）へ、また貴重な祭祀場面を特別に見せていただき、忙しいなか調査資料をチェック、聞き取りにお付き合いただいた神司の方々をはじめ、竹富島でお会いした多くのの方々へ深く御礼を申し上げます。更に、本稿を仕上げるにあたり、的確なアドバイス・ご指導をいただいた光井渉氏（東京芸術大学助教授）へ深く感謝を申し上げます。

注

- 注1) 「拝所」は、一般的に「ウガン」または「ウガンジュ」と呼ばれる。参考文献1) pp. 306, 参考文献2) 上巻 pp. 279 参照。また、「御嶽」は地域によって呼称や機能、意味が異なる。参考文献3) pp. 91-92, 参考文献4) pp. 15-16, 参考文献5) pp. 124 参照。
- 注2) 集落創成に関わる代表的な拝所に、聖地巡礼である東廻り（アガイマリー）・今帰仁廻り（ナキジンマリー）を仮設する香炉が付属している例がある（北中城村安谷屋「上の御嶽」・筆者の調査による）。
- 注3) 墓所である「骨神（フニンシ）」が、集落の東側にあることから、後年、「東ヌ御嶽（アガリヌウタキ）」と呼ばれるようになった例がある（南風原町津嘉山・参考文献6) pp. 438 と筆者の調査による）。また、祭祀集団が衰退しつつある近年において、多数の拝所を少人数で合理的に廻るため、集落の近場や代表的な拝所に、複数の遣拝香炉を設けている場合がある（糸満市大里「南山城」・筆者の調査による）。
- 注4) 拝所に所属する祭祀集団・親族や、集落の公民館役員が、祭祀行事によって編成され、神職役の代理として、あるいは分担で拝所を祈願する例がある（北中城村安谷屋・糸満市大里）。
- 注5) 参考文献8) pp. 77-121 参照。
- 注6) 参考文献9) pp. 136-138 参照。
- 注7) 参考文献10) pp. 11-26 参照。
- 注8) 参考文献11) pp. 112, 参考文献12) pp. 15 参照。
- 注9) 島に様々な種子を持ち込んだといわれるニールン神の船のとも綱を掛けたと言い伝えられる石があり、来訪神を向かえる場所として機能している。参考文献13) pp. 3-4 参照。
- 注10) 御嶽の類型については、様々な解釈と方法がある。参考文献4) pp. 16-22, 参考文献13) pp. 60-61 参照。本稿では、波照間永吉氏の分類方法である、御嶽の管理・管轄（氏子・公民館）による分類と、御嶽の性格（親・子）による分類の2つの方法を考慮し、3つの類型を設定している。
- 注11) 年間祭祀行事のなかでも、山人数が現れる祭祀は、徳利祭の御嶽徳利（オンブイ）と長月祝い（ナーキヨイ）だけである。参考文献9) pp. 136-138, 参考文献13) pp. 56 参照。
- 注12) 玻座間御嶽を祖神とする共同体は、玻座間村の草分けで、波利若御嶽・花城御嶽・久間原御嶽を祖神とする共同体は、玻座間村への後入りだとされる。また、仲筋御嶽を祖神とする共同体は、仲筋村の草分けで、幸本御嶽を祖神とする共同体は、仲筋村への後入りだとされる。参考文献

8) pp. 87-89 参照。また、近年の氏子の居住構成は、玻座間村と仲筋村の間で複雑になってきている。参考文献12) pp. 9 参照。

- 注13) 神司の継承は、伯母から姪へ母から娘へ継いだり、嫁が継ぐ場合があるが、最近では御嶽の世話役（カンマンガー）の嫁が継いだり、殿居元から出嫁した娘が継ぐ場合もある。参考文献9) pp. 149 および pp. 153-155 参照。このように、婚姻関係の複雑化により、殿居元と神司の住居が異なる場合が多い。
- 注14) 徳利祭において、村住人単位（東村・西村または、玻座間村・仲筋村の住人）で祭祀に参加している。参考文献16) pp. 64-65 参照。
- 注15) 竹富島における御嶽への所属は、同一家族内で異なり、他地域に比べ多様である。参考文献14) pp. 254-257 参照。
- 注16) 竹富島の結願祭は、「ユウニンガイ（四月大祭・西塘大祭・結願祭・九月大祭）」と総称される祭祀形態に類型され、西塘御嶽・清明御嶽・幸本御嶽で「夜籠もり（ユウグムイ）」が行われることが特徴である。参考文献11) pp. 153-154 参照。また、上記4祭祀では、ほぼ同じ場所（22カ所の拝所）と過程で祈願が行われる。参考文献 pp. 136-138 参照。
- 注17) 参考文献15) pp. 11 と pp. 153 参照。
- 注18) 2004年9月20日・21日に行われた結願祭において、筆者と調査協力者1人と手分けをし、祈願ルートと参加者の着座位置の記録を行った。また21日は、来訪神歓待の儀礼である「世迎い（ユーンカイ）」と重なったため、午前中に結願祭における一連の御嶽での祈願を終えた後、正午過ぎに世迎いが行われ、その後に結願祭の奉納芸能が行われるという特異な祭祀進行を経ている。
- 注19) 2002年から幸本御嶽の神司は不在だが、幸本御嶽での夜籠りや、ニールンでの祈願の際、別の神司や主事が幸本御嶽の神司が担う供物を所定位置に準備している。また、西美崎御嶽の男司（オトコツカサ）は、仲筋村生盛屋の家主が担当している。竹富島では、司と呼ぶ場合は女性の神司のことを示し、男司と呼ぶ場合は、男性の神司を示す。参考文献17) pp. 114-115 参照。参考文献9) pp. 109 参照。
- 注20) 「殿居徳利（オンブイ）」「四月大願い（シガツフーニンガイ）」「九月大願い（クガチフーニンガイ）」「西塘はんはじり」においては、神司と公民館執行部が、村御嶽とセットで幸本御嶽での祈願や夜籠りを行うことから、幸本御嶽は村御嶽と同等な祈願対象として位置づけられる。参考文献16) pp. 65 や9) pp. 136-138 参照。
- 注21) 内盛正子氏（花城御嶽の神司）と、島仲由美子氏（仲筋御嶽の神司）からの聞き取りによる。
- 注22) 1987年の結願祭については、参考文献11) pp. 153 参照。参考文献18) pp. 104-106（1965年の調査記録）の結願祭の記録では、美崎御嶽・東美崎御嶽・西美崎御嶽・ニールンへ分かれて祈願を行っていたという記述がある。一方、同書に結願祭の類型であるユウニンガイ（四月・九月）が別記されており、幸本御嶽・仲筋御嶽の神司は西美崎御嶽・ニールンへ、波利若御嶽・花城御嶽・久間原御嶽の神司は東美崎御嶽へ、玻座間御嶽の神司は美崎御嶽へ分かれて参拝していたことが記録されている。このことから、1965年当時の結願祭では1987年と同じ参拝分担の方法が採られていたと考えられ、この分担方法は過去長年行われ、近年になって再編されたことが解る。
- 注23) 参考文献9) pp. 153-155の上勢頭芳徳氏による神司系譜図と参考文献19) pp. 296-305の神司の屋号名、および参考文献12) pp. 19の屋号図と照らし合わせることで、1962年〜1972年における神司の居住位置を明らかにすることができる。
- 注24) まず幸本御嶽の神司（入仲本静氏）が1977年に引退、その後1981年に久間原御嶽の神司（安里八重氏）が引退し、神司が4人となる。久間腹御嶽に神司代理（田多幸子氏）が継いだ、実質的に司を勤めなかった。1987年以降、玻座間御嶽の神司（石川明氏）・波利若御嶽の神司（新苗氏）が引退し、玻座間御嶽には神司の代理（根原康氏）が就いて、玻座間御嶽・美崎御嶽・親泊御嶽のみの祈願を担っていたが、実質的な神司は、花城御嶽の神司（内盛正子氏）・仲筋御嶽の神司（登野原光氏）のみとなった。
- 注25) 1991年に波利若御嶽の神司（新田初子氏）が着任した後、1995年から玻座間御嶽の神司（富本定子氏）が着任し、1997年から久間原御嶽の神司（与那国光子氏）が着任し、現在に至る。また2001年に幸本御嶽の神司（請盛ハル氏）が着任するが、1年で引退する。参考文献9) pp. 153-155 参照。
- 注26) 上勢頭芳徳氏による新田初子氏・内盛正子氏への聞き取りから。

参考文献

- 1) 真栄田義見・三隅治雄・源武雄 編：沖縄文化史辞典，東京堂出版，1972
- 2) 沖縄大百科事典，沖縄タイムス社，1983
- 3) 仲松弥秀：神と村，梶社，1990
- 4) 波照間永吉：南島祭祀歌謡の研究，砂子屋書房，1999
- 5) 日本建築学会編：集住の知恵－美しく住むかたち－，技報堂出版，2005

- 6) 南風原町史委員会：「南風原 シマの民俗」，南風原町史第六巻 民俗資料編，2003
- 7) 北中城村史編纂委員会：北中城村史，北中城村役場，1996
- 8) 浦山隆一：沖縄八重山諸島の村落信仰における伝統的祭祀施設の空間構造に関する研究-聖なる空間の形態学序説-，神戸芸術工科大学学位論文，1999
- 9) 益田兼房：東アジア周縁部の土着の聖なる空間に関する研究，科学研究費補助金〔基盤研究A(Ⅰ)〕研究成果報告書，2003
- 10) 渋谷研：変貌する祭祀 - 沖縄の女性祭祀集団の持続と再編に関する一考察 -，沖縄民俗研究第14号，沖縄民俗学会，1994
- 11) 亀井秀一：竹富島の歴史と民俗，角川書店，1990
- 12) 竹富町教育委員会編：竹富島の集落と民家-竹富島伝統的建造物群保存地区保存計画見直し調査報告書-，竹富町，2000
- 13) 玉城 毅：竹富島の社会組織 - 祭祀からみた重層的・統合的な「村落」 -，地域研究シリーズ No. 28，八重山、竹富島調査報告書 (2)，南島文化研究所，pp. 39-74, 2000
- 14) 谷川建一編：村落共同体・わが沖縄，第四巻，1971
- 15) 上勢頭 亨：竹富島誌-民話・民俗編-，法政大学出版局，1976
- 16) 金城正紀・片山和俊・光井渉：竹富島における祭祀の機能と集落の空間構成に関する研究 - 穂利祭（ブイ）の祭祀空間についてその1 -，日本建築学会計画系論文集，No. 604，pp. 61-68, 2006. 6
- 17) 東京ソルボンヌ塾・宮沢智士編：竹富島に何か可能か，喜宝院蒐集館，1996
- 18) 琉球大学民俗研究クラブ編：沖縄民俗，第10号，第一書房，1988
- 19) 中山盛茂・富村真演・宮城栄昌：のろ調査資料，ボーダーインク，1990

(2007年1月9日原稿受理，2007年6月5日採用決定)